

けものフレンズR
[Resurrection]

A. Unno

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

けものフレンズ二次創作のである『けものフレンズR』をもととした三次創作です。

あらすじ

なぞのへしせつで目を覚ました少女「ともえ」は、ヒトの匂いをかぎつけてやってきたフレンズ「イエイヌちゃん」と、へたいせつなともだちをさがしに旅に出ます。

道中さまざまなフレンズと出会いながら、「ともえ」は自分が何者であるのかを知っていくのです。……

世界観の設定は1期およびアプリ版、補完的に2期のものを使用します。

ストーリーはけものフレンズ2とは乖離した、まったくオリジナルのものになる予定です。

無理のない範囲で、2のキャラクターも出していきます。

基本的にはともえちゃん視点の一人称小説です。

感想などは自由に書いていただけるとうれしいです。やる気が出ます。

この作品は、Pixivでも投稿しています。

<https://www.pixiv.net/novel/series/110>

1601

またニコニコ動画でも投稿しています。

<https://www.nicovideo.jp/watch/sm34929>

127

設定原案：祝詞兄貴(<https://nico.ms/sm34862414>)

本作品はけものフレンズ2のいわゆるヘイト創作に位置するものですが、ギスギス要

素はありません。

またけものフレンズ2の名誉等を毀損する意図もありません。

目次

第二話	第一話	第一話	第一話	第一話
「かんき	「であい	「であい	「であい	「であい
その1」	その4」	その3」	その2」	その1」
43	37	24	12	1

第一話「であい その1」

今日もおひさまが、空にかがやいています。

こんな日は、木陰でうとうとするにかぎりません。わたし——イエイ又にかぎらず、フレンズならばみんなそうでしょう。いまはじやぱりまんを食べたばかりなので、とくに眠たいのです。目を閉じると、いろんな音や匂いが、はつきりとしてきます。風が吹く音、はっぱがさらさらとこすれる音、舞い上がった土の匂い。

ああ、かすかになつかしい匂いもしてきました。これは、ヒトの——
ん？

ヒト!?

考えるよりもさきに、からだが動いていました。地面から一瞬で起き上がって、匂いのしてくる方向へ猛ダツシユです。風が運んでくる匂いは、どうやらわたしのなわばりの近くの『しせつ』からしているようでした。

くずれかけた壁を飛び越え、匂いのはじまっている場所へと急ぎます。階段を五段飛ばしで降り、こわれたドアを突き破ると、匂いがいつそう強くなってきました。まちがない——ついに、わたしが使命を果たすときがやってきたのです。

ヒトに会ったことはないはずなのですが、わたしの中のへなにかが、これがヒトの匂いだと知っています。いったい、どれほどこの日を待ち望んできたことか！

通路の奥から、ひととき強い匂いがしています。ということは、あそこにいるにちがいありません！

「——そこですかー!?!」

「うわああつ!?! なに!?!」

またもドアを突き破って飛び込むと、そこには——

目を覚ますと、そこはへまつしろの中だった。

ぷしゅう、という音が聞こえたかと思うと、目の前にあったへまつしろが急に開いて、あたしは外へ出られた。

「どこだろう……」

どこからか差し込んでくる日の光で、なんとかまわりが見える。せまい部屋は荒れ放題で、ところどころ天井も崩れかけている。自分が入っていた箱を見ると、そこにはなにかきらきらしたものがしき詰めてあって、何本か管が通っていた。

箱の外装には『SC……4……』なんか、とか書いてある。意味は、よくわからない。気を取り直してまたあたりを見回してみる。薄暗くてよくわからないけれど、部屋

にほかの人はいなさそうだった。

「んっんん……おーい！ だれかー！」

叫んでみたけれど、とくに返事はない。むなしく反響するあたしの声が吸い込まれていく。急に、いろいろと不安になってきた。あたし、誰なんだろう？ 名前も思い出せない。なんでここにいるんだろう？ あの箱はいつたいなに？

部屋には鏡があった。おそろおそろ近づいてみると、そこに写っているのは、帽子をかぶった緑色の髪の毛の女の子だ。自分の顔なのに、なんだか見覚えがないような気がする。目は左右で違う色をしているし、おまけに爪の色も緑色だ。

「な、なんだろこれ……どうしよ……」

と、途方に暮れていたそのとき。とつぜん、天井の方からすごい音がしてきた。だれかが走り回っているような、そんな音。それはどんどん近づいてきて——壁が勢いよく吹っ飛んだ。

「——そこですかー!?!」

「うわああっ!?! なに!?!」

「ああ……」そこに立っていたのは、全身が白っぽい……イヌっぽい……いやヒトっぽい……女の子、的なの？「会いたかった——っ!!」

女の子は目にもとまらぬ速さでジャンプすると、そのままあたしに飛びついてくる。

「うわー！ え、ちょ——」

あ、なんか、もふもふ——とか思っていると、受け止めきれずにバランスがくずれる。二人でひっくりかえって、あたしはしたたかに頭を打った。

「す、すみません……やつとヒトに会えたと思って、おもわず……」

ちょこん、と女の子が正座している。

かわいい。ちよつと目つきがするどいけれど、ぜんぜん悪い子じゃない。両目で色違いの瞳が、おずおずと上目づかいにようすをうかがっている。頭の上には、けもののような耳が生えていて、しかもおしりからはもふもふの毛でおおわれたしっぽが生えている。

かわいい生き物だ。なんていう子なんだろう。

「ううん、いいのいいの。えつと、あなたは？」

「わたし、イエイ又っていいいます。イエイ又のフレンズなので」

「フレンズ？」

あつ、そうか、という顔をイエイ又ちゃんはした。あたしが本格的に何も覚えていないらしいことをさとり、ちよつとだけ思案顔になる。どこから説明したものか、という雰囲気だ。

「フレンズというのは、わたしたちみたいなの動物がヒト化したものを言うんです。わた

し以外にも、たくさんの方々がいますよ」

「そうなんだ、ありがとう。——それにしてもイエイヌちゃん、どうしてあたしがヒトだつてわかつたの？　というかあたし、ヒトなんだね」

「ええっ」

イエイヌちゃんはちよつとオーバーにも思える反応をした。そして下から上までなめるようにあたしを見た後、「失礼します」と言つて、あたしの首筋のあたりをかぎ始めた。なんか恥ずかしいな。

「——やっぱりヒトですよ！　匂いでわかります！」

「匂い？　イエイヌちゃん、匂いでわかるの？」

「はい、イヌ科なので！　鼻がとってもきくんです」

「すごいね、イエイヌちゃん！　えつと、あたしは……」ああ、そうだった。名前、思い出せないだった。あたしは照れくさそうに頭を掻いて、あはは、と笑う。「ごめんなさい。なまえ、わからないんだ。あたし」

「ええつ、それつて、いま頭を打つたから」

「ああ、違うの！　イエイヌちゃんのせいじゃないよ！　元からの」

「そうなんですか……」イエイヌちゃんは心配そうに、あたしのたんこぶを見つめている。「なめたら治りますかね？」

「へっ!? いや、大丈夫! ほっとけばなおるよ!」

そうですか、とちよつと残念そうにイエイヌちゃんは戻っていく。

「あ、もしかして」イエイヌちゃんにはなにか心当たりがあるらしく、ひとりでうなずいている。「記憶喪失なんでしょうか」

「たぶん、そうだと思う。自分の、名前も思い出せなくて……」

「大丈夫ですよ! ときどき、そういうフレンズの子もいますから」

イエイヌちゃんはおかしいだけでなく、やさしい子でもあるみたいだ。人懐っこい笑顔を浮かべて、ぱたぱたと尻尾を振っている。

「イエイヌちゃんはすてきなフレンズなんだね」

「そんなことないですよ」

ちよつと照れくさそうに笑ったイエイヌちゃんは、「でも」と立ち上がって言った。

「ヒトもすてきなどうぶつですよ! わたしはヒトに尽くすために生まれてきたんですから!」

「つくす……?」

「はい!」イエイヌちゃんはパタパタと尻尾を振っている。「なんなりと命じてください、ヒトはわたしのご主人さまなので!」

「ご主人さまって……」

「あれしろ、とか、これしろ、とか。そういうことを言ってくれるヒトです！へしゅじゅうかんけい！ってやつです！」

「そんなこと、しないよ」

「えっ」

「だってイエイヌちゃんは、あたしのおともだちでしょ？」

「そんな」愕然とした様子で、イエイヌちゃんは何歩か後ずさった。「わたしではなにか不足ですか!？」

「そんなことないよ！ イエイヌちゃんはすっごくかわいいし、やさしいし。へしゅじゅうかんけい！っていうのはよくわからないけど、おともだちからじゃダメかな……?」「ダ、ダメではないですけど……」

はうう、とイエイヌちゃんはよくわからないところから声を出した。照れているのか、もじもじしている。やつぱりかわいい。

とにかく、なにか思い出せるような手がかりを探そう。もう一度部屋を見回すと、そこにはかばんが落ちていた。

「これ……あたしのかな？」

中に入っていたのは、スケッチブックと、ぼろぼろになったどうぶつ図鑑に、あとはクレヨンだった。もしかしたら、と思つてスケッチブックを開いたけれど、とくになに

も手がかりはない。

「あ、ここ。なにか書いてありますよ」

イエイヌちゃんが指差したところにはへとも

え〜と書かれている。

「とも……………え……………」

「それがお名前なんでしょうか」

「……………うーん、特にピンとはこないけど」でも、こういうときは悩んでいても仕方がない。

「うん、そうしよつか！ あたし、ともえ！ よろしくね、イエイヌちゃん」

「はい！ よろしくお願ひします、ともえさん！」

「もう」イエイヌちゃんはちよつとおカタい。そこもかわいいけど。「さん付けはやめて

よー」

「じゃ、じゃあ、ともえ……………ちゃん」

「えへへ。なんか照れくさいね」

「もう、ともえさ——じゃなかった、ともえちゃんが言ったんじゃないですかー！」

「あー、またしゃべり方がかたいよー」

「うう、こればかりはまだ……………」

イエイヌちゃんは困ったように耳をおさえている。代わりに、しつぽがびよこびよこ
と動いて恥ずかしがっているみたいだ。ちよつとからかいたくなってしまう。

「そういえば、そっちの……その本はなんなんでしょう」

「これ？ これは図鑑……だね。どうぶつ図鑑って書いてあるよ」

でも、ちよつと古くなっているみたい。水にぬれたり、落つことされたりしたようなあとがある。ページもけつこう抜けていて、ぼろぼろだ。ぱらぱら、とめくると、「おお……」とイエイヌちゃんが反応する。

「なんだかこれも、なつかしい匂いがあります！ とめえちゃんといっしょですよ！」

「えつ、そうなの？ じゃあやつぱり、これもあたしのなのかな？」

そのままぱらぱらとめくっていくと、大きくやぶけたページに出る。ここらへんだけまとめてページが落ちていて、なんのどうぶつが載っていたのかぜんぜんわからない。下の方だけが残ったページには、なにやら文字が書かれていた。

「へたいせつな、ともだち」……」

「大事なともだちがいらつしやつたんですね」

「うーん、もしかしたら、その子に会えばあたしのこともわかるのかな……でも、なんの動物のページなんだろう……なにか、心当たりある？」

「いえ、わたしには、完全にやぶれちゃってますし……こういうのは、『としよかん』で聞かないかと」

「図書館？」

「はい。しんりんちほーってところにあるんです」

しんりんちほー、か。特に聞き覚えはない気がする。

あ、そういえば。ここがどこなんだか、すっかり聞くのを忘れてた。

「ごめん、いまさらなただけど……ここって、どこなのかな……?」

「ここですか? ここはジャパリパークの真ん中にあるパーク・セントラルです!」

「ジャパリ、パーク?」

「フレンズがたぐさん暮らしてて、すつごーくひろいんですよ!」

ジャパリパークかあ、なんだか楽しそうな響きの言葉だな。でもやっぱり聞いた記憶がない気がする。というか、イエイヌちゃんの言葉を信じるなら、

「もしかして、図書館もすつごーくとおいつてこと?」

「はい、歩いたら何日もかかっちゃうかもです」

イエイヌちゃんは内容にそぐわず元気いっぱいに答えてくれた。

「まあ、しょうがないか……」

「案内しますよ! 図書館で、そのへたいせつなともだちを探しましょう!」

「本当に? 何日もかかっちゃうけど、いいの?」

「おまかせください! それがわたしの使命ですから!」

どん、とイエイヌちゃんは胸を張った。ふふん、と鼻を鳴らして「さあ行きましょう

！」とあたしの手を取る。

「うん」

イエイヌちゃんの手は、とってもやわらかかった。
しかもどこか、なつかしい気がする。

第一話「であい その2」

「あ、そこ段差あるから気を付けてください」

「おっとと、ありがと」

イエイ又ちゃんはとつても礼儀正しい。最初こそテンションがすつごく高かったけれど、いまはなんだかしつかり者に見える。

薄暗い廊下は、ちょこちょこ天井が地上まで抜けていて、光が落ちていた。どういう建物だったかすつごく興味があわくけど、それ以上に気になることもあった。

「ねえ、あたしつてどんな匂いなの？」

「ふむ……むずかしい質問ですね」足を止めたイエイ又ちゃんは、考え込むようにあごへ手を添える。天井からの光が当たって、右の目が水色に光った。「一言で言うとなつかしい……んですけど、でも、それだけじゃないっていうか……」

「ふうん、そうなの」なつかしい、か。「イエイ又ちゃん、むかし人に会ったことあったの？」

「ある……はずなんですけど、そのときのことを覚えていなくて」

「もしかして、イエイ又ちゃんも記憶喪失？」

「いえ、フレンズ化する前の記憶だと思うので。どうぶつはサンドスターっていうキラキラとぶつかる、フレンズになるんです。そのとき、前の記憶をなくしちゃう子もいるので」

「へえー……そうなんだ。ものしりだね、イエイヌちゃん」

「そつ、そんなことないですよー！」

口ではそう言いつつ、しつぽがものすごくぱたぱたしている。イエイヌちゃんは顔じゃなくてしつぽに出やすいタイプみたいだ。

階段を上がると、だんだんあたしにも匂いがわかってきた。空気の匂い。土や葉っぱが織りなす自然の匂いが、鼻をくすぐる。記憶喪失だけれど、この匂いをずっと嗅いでいたことはわかる。

「あ、そうだ。それこそ、記憶喪失のヒトの話なら〈はかせ〉が詳しいですよ」

「そうなの？」

「実はさいきん、ジャパリパークにヒトがいたんです。〈かばんさん〉っていうんですけど——そのヒトも、最初は記憶喪失だったそうなので」

「そうなんだ」でもイエイヌちゃんの言い方だと、もうその〈かばんさん〉はパークにはいないみたいだ。「〈かばんさん〉、どこに行っちゃったの？」

「ヒトのなわばりをさがしに、別の島へ行ったとか」

「じゃあ、この島にはヒトはいなかったんだね」

「そういうことになるんでしようか」

会つてみたかったな、かばんさん。同じヒトの仲間がいるなら、心強いんだけど。

長い長い階段が終わろうとしている。外の匂いはどんどん強くなつてきて、風が下まで舞い込んできた。砂が混じっているそれに、あたしはおもわず帽子をおさえる。自然と笑みがこぼれてきて、駆け足にのぼつていく。

「うわあ……すごいな、ここ……」

おおきな空が、どこまでも高く、青い。それと対照をなすように、地面には草原が広がっている。風が吹き抜けていくと、少し遠くにある木々が揺れた。さらにその奥にあるのは——赤い、おおきな車輪？

「なんだろうあれ……」

「ああ、あれはへかんらんしゃ」というものらしいです。いまは壊れているので、あんまり近づかない方がいいそうです」

へえ、と思いつながら、自然と手がかばんに伸びる。片手でクレヨンとスケッチブックを手にとって、青色のクレヨンをすべらせる。手が勝手に動いていた。まるでいままでそうしてきたかのように、自然に、あたしは目の前の風景を絵にしていく。

「ともえちゃん？ なにしてるんですか、それ」

「えっ？ ああ、絵を描いたの」

きれいな風景だから、つい——とスケッチブックを手渡す。イエイヌちゃんの顔がぱああつと明るくなつた。スケッチブックをいろんな角度にして、とつてもはしゃいでいる。

「すごいですね、これ！ まるでオオカミさんみたいです」

「オオカミさん？」

「はい、ろっじアリツカつてところにマンガ家さんがいるんです。でも、ともえちゃんの絵もとつてもすてきです」

「へえ、マンガ家さんなんているんだ。なんかそんな子と比べられちゃうと照れるな」

「これから会えますよ。〈あれ〉さえ使えば、きつとひとつとびです」

「〈あれ〉？」

ふふん、と鼻を鳴らすイエイヌちゃんは、なんだかとても得意げだ。イエイヌちゃんの案内についていくと、森の中から急に建物が現れた。かなり古びているけど、あのへしせつよりはまだきれいなほうだ。入り口のシャッターは半開きで、そこから何か見えている。

「こちらに乗って移動します！」

「うわあ！ すっごーい」

そこにあつたのは、黄色いサイドカー付きのバイクだった。真新しくて、あんまり使われてないように見える。ライトが二つついていて、どうぶつの顔みたいなデザインになっていた。カッコイイな、これ。

「これバイクだよな？ 運転していいのかな？」

「バイク？ はよくわかりませんが、ヒトは乗り物が運転できたそうです」

「ようし、じゃあ乗ってみようよ」

とりあえずまたがってみると、なんとか、ぎりぎり足がペダルにとどいた。イエイヌちゃんはサイドカーにちょこん、と座つて、楽しそうに尻尾を振っている。バイクに興味々々な様子で、あちこち叩いたり撫でたりしていた。

「うーん、どれが電源ボタンなのかな……？」

なんとなく勘で、ハンドル横の赤いボタンを押してみる。すると、どるん、という音とともにモーターが動き出した。正解のようだ——けど。

「あれ……？」

みるみるうちに音が小さくなり、止まってしまった。電池切れのような気がする。そういうえば、バイクからなんかコードが伸びてたような。

「イエイヌちゃん、バイクから伸びてる紐、ちゃんとどこかにつながってるか確認してくれん？」

「任されましたっ」

きまじめな敬礼をして、イエイヌちゃんはサイドカーから身軽に飛び降りる。黒いコードを追いかけて、部屋の奥へとずんずん進んでいく。先はちよつと薄暗くなつていて、よくわからない。

「どうー?」

「なんか、穴に刺さってます」

「うーん、じゃあコンセントは大丈夫か……」

どうしたもんかな、ともう一回電源ボタンを押すと、急に機械っぽい音声が流れた。へけんげんがありません。うわ、とあたしが驚いていると、すぐにイエイヌちゃんが飛んでくる。

「どうしました、大丈夫ですかっ」

「う、うん。でもけんげん? がありません、だって。運転しちやダメなのかな」

「ええ、動かないんですか」

うん……:とうなだれていると、イエイヌちゃんは「うーむ」とちよつと悩み始めた。

「これは、ボスに頼んだ方がいいかもしれませんね」

「ボス?」

「はい。へかばんさんも、ボスと一緒にへばすに乗っていたそうなので」

かばんさんもそうだったんだ。ますます会いたくなくなってきたなあ、かばんさん。きつと、いまのあたしとおんなじような苦勞をしてきたんじゃないかな。そしたら、いろいろなお話ができそうなのに。

「そのボスっていうのは、どこにいるの？」

「ボスはどこにでもいますよ！ ちよつと探してみましよう」

「そうだね、イエイヌちゃんの鼻があればいちころだよ！」

「ぜんっぜん、見つからない……」

もうお日さまがかなり高いところまで来ているのに、まだボスは見つからなかった。イエイヌちゃんの話によると、ボスは水色で、尻尾があつて、耳もあつて、でも小さくてかわいいらしい。

そんなかわいいデザインならすぐに見つかりそうなものなのに。すると、きゆるる、とおながが鳴った。そういえば目が覚めてから、なんにも食べてないんだった。

「おや、お腹が空いてるんですか」

「あはは……お恥ずかしい」

それなら、とイエイヌちゃんが差し出してきたのは、黄色くてまんまるなパンのようなものだった。

「これほっ！」

「じゃぱりまんです。おいしいんですよ」

そう言うのと、イエイヌちゃんはじゃぱりまんのはしっこをちよつとだけでもぎって、口に放り込んだ。もぐもぐと食べながら、どうぞ、とほほえむ。

「じゃあ、いただきますー!」

思い切って大きくかぶりつくと、ふわふわの生地の間から、塩味のペーストがじゅわ、と出てくる。お肉とも野菜ともちがう感じだけど、とつてもおいしい。あたしはそのまま夢中になって食べ進んで、あつという間にじゃぱりまんはなくなってしまった。

「あつ、ごめん。せつかくのじゃぱりまん、全部食べちゃった……」

「いえいえ大丈夫ですよ、まだまだありますから」

でも、とイエイヌちゃんはちよつと困ったような顔をした。どうやら、じゃぱりまんはいつもボスが運んでくれるものらしい。あたしのぶんもそのうちもらわなきやいけなくなるし、ますます見つけなくちゃいけない。

「こういうときは、へたんでい」にたよるのが一番です」

「へたんでい、そんなのいるんだ」

まあ、ちよつとおつちよこちよいな人たちですけど、とイエイヌちゃんは付け加える。探偵かあ、きつときぞかし知的な感じのフレンズちゃんがやってるんだろなあ。イエイヌちゃんはその子たちのへじむしよ」を知っているらしく、こつちですよーと先導し

はじめた。やっぱり頼りになるなあ、イエイヌちゃん。

しばらく歩いていくと、なんだか特徴的な建物が見つかった。

「ここが、事務所？」

「そうですよ」

岩山を横した大きな建物には、へわすれものセンターという文字があつた。なるほど、へたんていじむしょはここに入っているらしい。二階に上がって、入り口のドアを開けると、壁の向こうからなにやら声が聞こえてきた。

「——お願いしますです、探してくださいなのです」

「……イエイヌちゃん、先客がいるみたいだよ」

「とりあえず入ってみましょう」

ドアを開けると、そこにはフレンズが三人、一斉にこちらを向いた。いましゃべっていたのは、一番手前の貝殻を着けた子だ。短めの髪は白いが、下半身にかけて黒い毛でおおわれている。なんだかおっとりとした印象を受ける子だ。

「あなたたちは？」

「こんにちは。あたし、ともえつて言うの。こっちは、おともだちのイエイヌちゃん」

どうも、とイエイヌちゃんはおじぎをする。それを受けて貝殻の子も、のんびりとしたおじぎを返してきた。それに合わせて、水色の貝殻がきらきらとゆれる。

「こんにちはです。わたし、カリフォルニアラッコです」
「カリフォルニアラッコちゃんね、よろしく」

ささっと、図鑑を開いてみる。ぱらぱらとめくってみて、それらしいどうぶつのページを探してみると……あつた、ラッコ。へ触毛と呼ばれる体毛が密に生えており、ここに空気をたくわえることで海中でも体温を維持できるかあ。つまり、あつたかくてふわふわのかな、撫でてみたいな……。

「む、なんだろう」

「ああ、新しい依頼者のかたですか？」

奥にいたふたり——きつとこの子たちが、イエイヌちゃんの言うへたんていかな——が、ラッコちゃんの後ろから顔を出した。二人ともちよつと雰囲気が似ているけれど、べつのどうぶつらしい。黒髪でぼつっんのレンズと、金髪で丸い耳がかわいいレンズ。ふたりとも特徴的な帽子をかぶっている。

「わたしはオオアルマジロのアルマー。そしてこっちは」
「オオセンザンコウのセンちゃんです」

自分でちゃん付けしてる……。

アルマーちゃんが黒髪の子で、センちゃんが金髪の子か。よし、覚えた。イエイヌちゃんはおつちよこちよいとか言っていたけど、案外ちゃんとしてそうな子たちだ。図

鑑を読むと、

「アルマジロは丸まれるけど、オオセンザンコウは丸まれないのか……」

「いえ、わたしもアルマーから習ったので、いまは丸まれますよ」

「ええっそうなの!? すごいなあ、フレンズってやつぱり不思議だな……」

「センちゃんは、わたしほどはうまくないけどねー」

あはは、と二人で笑い合っているへたんてい〜コンビは、とつても仲がよさそうだ。ちよつと話がわきみちに逸れてきたところで、イエイヌちゃんがラッコちゃんにたずねる。

「あの、わたしたちも依頼があつたんですが、カリフォルニアラッコさんもなにかトラブルが?」

「はい……じつは、さいきんお気に入りのへいし〜をなくしてしまつたんです。……あれがないと眠れないのです……」

「ああ、わかりますその気持ち。ねどこって大事ですよね」

イエイヌちゃんとラッコちゃんはさつそく意気投合している。なんか微妙に、話している内容が違う気がするけれど。

「今日は大いそがしだねえセンちゃん。まずはラッコさんの依頼を解決しなきゃだ」

「そうですね。すみませんが、もう少し待っていてもらえませんか」

「そういうことなら、あたしたちも手伝うよ！」

「ええ、いいんですかあ。ありがとうなのです」

ラッコちゃんは大喜びでわたしの手を取った。ふわふわな毛でおおわれているのかと思つたら、案外ぶにぶにしているやわらかい。

「簡単な探しものだし、人手は多いほうが助かるねえ」

「そうですね。じゃあ今日だけ、ともえさんとイエイヌさんにはへじよしゆをやってもらいましようか」

「へじよしゆかあ……いいねえ、楽しそう」

「ようし、早く見つけて、わたしたちもへたんでいのおふたりに解決してもらいましよう！」

第一話「であい その3」

「——それで、そのへいし〱っていうのはどんなものなの？」

まずはアルマーちゃんとセンちゃんがへじしようちようしゆ〱をするらしい。あたしはとなりに座って、スケッチブックにその絵を描くお仕事だ。イエイ又ちゃんはかわい
い担当なのでまだ出番がない。

「えっと……あれはこの前、海辺で散歩していたときに見つけたのです。上のほうが
ちよつと丸つこくて、下の方は長細くて、ぎざぎざなのです」

「う、うーん、まるでイメージがわからないや、あたし……」

スケッチブックへ言われたとおりに描いてはみるものの、なんだかほんとうにあるの
かなあって感じの形になっている。あやしいキノコみたいな絵になってしまった。探
偵の二人は、根気よくまた質問をしている。

「大きさはどのぐらいかな？」

「重さはどのぐらいですか？」

「ううん、てのひらと同じぐらいの大きさです。重さもそんなになかったかもです。ほ
ら、ラッコのフレンズってみんなへいし〱でものを叩くのが好きなので、手で持てない

サイズはNGなのです。でも、今朝気づいたらなくなつてて……」

なるほどねえ、とアルマーちゃんがわかったようなわかつてないようなセリフを言った。腕を組んでいるセンチちゃんは、ううん、と悩んだすえ、「あつ」と声を上げる。

「もしかして、へゆうえんち」の近くのあそこにあるんじゃないですか」

「んん、ああそうか、それはあるかもね、センチちゃん！」

「なにか当てがあるの？」

とあたしが聞くと、となりのイエイ又ちゃんが「——ああ、あそこですね」とあいづちを打った。どうやら、このあたりに住んでいるフレンズちゃんたちには有名な場所らしい。

「パーク・セントラルにはへゆうえんち」があるんです。ちようど、かんらんしゃがあるところなんですよ」

「へえ、行つてみたいな」

今から近くに行きますよ、とセンチちゃんが言う。探偵ふたりの推理によると、ラッコちゃんの言うようなへいし」がたくさん集まっている場所があるのだという。

「さて、着いたね」

へわすれものセンター」から歩いて少しの森の中に、一ヶ所だけ開けた場所があつた。そこには、いわゆるガラクタが大量に山を作っていた。ちよつとやそつとの量ではない。

フレンズが縦に三人ぐらい並んだぐらいの高さがある。

「こ、この中から探すんですか……」

イエイヌちゃんがちよつとあとずさっている。いくら五人もいるとはいえ、ちよつとこの量は気おくれするのともうぜんだ。

「わたしたちの推理が正しければ、ラッコさんは、この近くの砂浜でへいし〜を拾ったんだと思うんだよねえ」

「そうなのです。たしかに、この近くの海辺はよく散歩するのです……でも、これは」
「ムリなのでは……?」

「あきらめてどうするんです、きつとこの中にこそへいし〜が!」

わーつとセンちゃんが果敢に挑んでいく。話しかたに似合わず、意外と熱血担当なのかも知れない。対照的にアルマーちゃんは、もう一回ラッコちゃんに話を聞いている。

「ううん……さっきの話では、なくしたのもこのあたりってことだったけど」

「はい、昨日はめずらしく陸で寝てたのです。だから海に落としたりってことはないと思うのです」

「ひとりでへいし〜が動くわけないもんね……本当にここにあるのかな」

「すくなくとも、ラッコさんが拾ったのはこの山から転がってきたものなのでは」

「ふへえ……とても見つかりそうにないのです……」

突っ走っちゃったセンチちゃんが戻ってきて、へろへろ、と地面に崩れ落ちる。いろいろがさがさやっていたみたいだけど、この山を前には歯が立たないみたいだ。

なにかいい手はないかな——そう思っていると、

「しっかしこの山、特徴的な匂いがしますね……」

鼻をつまみながら、イエイヌちゃんが言った。そのとき、頭の奥でなにかが、ぱつとひらめいた。イエイヌちゃんなら、ここから見つけ出せるかもしれない。

「ねえ、イエイヌちゃん。ちょっと思いついたんだけど」

「はい、なんででしょう」

「ラッコちゃんと、このがらくた山の匂いが一緒にする方をたどれば、もしかして見つかるんじゃないかな？」

「はあ、なるほど」

「うん？ どういうことかな」

四人とも首をかしげているので、あたしはなんとなく頭に浮かんだアイデアを整理してみる。

ここ最近ずーっと肌身離さず持っていたというへいしゝなら、それにはきつとラッコちゃんの匂いがついてはいるはずだ。さらにそのへいしゝがこのがらくた山の出身なら、その匂いもたぶん残っている。ということ、それらふたつが同時にする方向をたどれ

ば、そのへいしゝがある近くまで行けるはずだ。

「なるほど、そういうことなのですか」

「このままやみくもに探すよりはいいかもしれません。——やってもらえますか、イエ
イヌ」

ようし、まかせてください、とイエイヌちゃんは張り切つて——ラツコちゃんの首筋の匂いを嗅ぎ始めた。

「うわあ、なんか恥ずかしいのです」

「ふむふむ……海の匂いともまた違った感じですね……ふむふむ……」
「行けそう?」

「なんとか辿れそうです。とりあえず、ここから離れた方がよさそうですが」

イエイヌちゃんの嗅覚は思った以上にするどくて、迷う様子もなくずんずん進んでいく、がらくた山を中心に円を描くように歩き回つて、とくに匂いの強い方を探してみられるらしい。ぐるぐると何周か歩いてみて、イエイヌちゃんは突如「こつちですね」とさらに陸のほうへと歩き始めた。

「むっ? 海じゃないの?」

「ああ、話だとからくた山より陸の方には行つてなかつたそうですが」

「たしかに……わたし、あんまり海から離れた場所にはいかないのです」

「まあまあ、イエイヌちゃんを信じてみようよ」

そんなあたしたちのおしやべりを背に、イエイヌちゃんはどんどん森の奥へと進んでいく。その行く手には、またあの赤い車輪——かんらんしゃがあつた。ということは、これ、ゆうえんちの方へ向かつてるのかな。

「むむむ……このあたりで匂いが途切れているような気がしますね……」

「ええ、こんな森のなかで？」

「わたし、来たことないのです……」

「す、すみません、わたしの力不足のようで……」

ちよつとだけ、探偵の二人はうたがっているようだった。でも、イエイヌちゃんはいつだつて真面目だ。今回だつてそう。だから、もしこのあたりで途切れていたなら、本当にこのあたりにいるはずだ。申し訳なさそうにしているイエイヌちゃんのためにも、こんどはあたしが頑張らなきや。

「ん、なにしてるの？」

「このあたりを探してみようって思つて」

草むらをかき分けはじめると、アルマーちゃんが不思議そうに聞いてきた。するとすぐ、イエイヌちゃんが待つてくたさい、と止めに来る。

「きつとわたしの勘違いですよ。やっぱり、戻つたほうが——」

「まっってください、あれー！」

なにか見つけたらしいセンちゃんが、かんらんしやの方を指さしている。その先にいたのは、水色で、尻尾があつて、耳もあつて、でも小さくてかわいらしい——二本足のいきものだ。

あれがボスか！

「あのボス、なんか頭の上に乗ってますね。じゃぱりまんじゃなくて……なんだろ、あれ」

「ああつ、あつちから匂いがしますー！」

とつさに、イエイヌちゃんはボスに向かって走りはじめた。あわててあたしたちもそのあとを追っていくと、ボスもこちらに気が付いたようだ。

「……………」

こちらを向いたまま、ボスは固まっている。その目はあきらかにあたしを見ているけど、なにも言わない。しばらく見つめ合っていると、イエイヌちゃんが「これなのでは？」と何かをボスから取り上げた。

それはたしかに手のひらサイズで、丸っこい頭に、細長くてギザギザしたみぞがついている。

「そうか、へいし〜ってネジのことだったんだ……」

「あーっ！ これです！ よかったあ、ついに見つかったのです」

「でも、なんでこれをボスが？」

「たしかに……」

みんな一様にボスを見つめていたけど、ボスはやっぱり何も言わない。しゃべれないタイプの子なのかな、なんて思っていると、突然ピコピコという音をボスが発し始める。

「……検索中、検索中。パーク内アーカイブに該当なし。所与条件より推論的演算開始……対象を、ヒトに準ずるものとして識別。一般接客対応プロトコルを適用します」

「な、なんかボスが急に変なこと言い始めたよ」

「ぜんぜんわからない……」

全員で急にしゃべりだしたボスに戦々恐々としてみると、ピコピコという音が急に止んだ。すると、くるくると周りを見回して、またあたしの方を向く。

「——はじめまして。ボクはラッキービーストだよ。よろしくね」

「あ、こんにちは。あたしはともえっていうの。よろしくね」

「えっ……」

「うそ……」

「ボス……」

「「しゃべれるのーっ?!」」

「えっえっ、どうしてみんな、そんなに驚いてるの?」

聞いたところによると、ボス——ラッキービーストさんはフレレンズにはまったく口をきいてくれないらしい。実は噂のへかばんさん〈だけ〉には、しゃべってくれることもあつたそうだ。ということとは、ヒトにしか反応してくれない、つてことなのかな。

「どうしてネジを集めてるの?」

「——これは、へはいざい〈だからね。壊れた観覧車を直すために集めてるんだ」

「なるほど、じゃあへいし〈はもともと、かんらんしゃのパーツだった、つてことでしようか。だから、ボスが集めちやつたんですね」

「ラッキーさん。もしよかつたら、このネジ、もらつていてもいいかな?」

「かまわないよ。代わりはいくつかあるからね」

「よかつた! ラッコちゃん、これで安心して寝られるよ!」

ラッコちゃんのねむたそうだった目がぱあつと明るくなって、「ありがとうなのですー!」と言つてあたしに抱きついてきた。空気を含んだ毛皮はふわふわで、もふもふに包まれている感じがする。ああ、図鑑にのつてた通りだ……!

「イエイヌさんもありがとうなのです! おかげで今日はよく眠れそうなのです」

「いえいえ。わたしはみなさんのお手伝いをしただけですから」

ちよつと謙遜しているイエイヌちゃんに、容赦なくラッコちゃんは抱きついている。

探偵のふたりは、さつき少し疑ってしまったことを気にしているのかその様子を見守っていた。

「あ、あの、さつきはうたがってごめんね」

「わたしも、申し訳ないです。——本当に、鼻のよく利くフレンズなんですね」

「そんな、ぜんぜん気にしてないですから。大丈夫ですよ」

イエイヌちゃんはくすぐったそうに笑っていて、いっしょに探偵をやらないかと誘ってくる二人に困っていた。

「困ります、わたしはともえちゃんの——」

「おともだち、だもんね」

うう、と弱りきった表情がかわいくて、またちよつといじわるをしたくなってしまう。やっぱりまだ、イエイヌちゃんはへしゅじゅうかんけいというやつに憧れがあるみたいだった。ヒトとけものつて、どっちが上というものでもないと思うんだけれどな。

「あつ、そういえば。おふたりはよろしいのです？へたんていのおふたりにご依頼があつたんじやないです？」

ラツコちゃんの台詞で、そうだった、と探偵コンビは思い出したようだった。でも、もうその必要はなくなっていた。

「大丈夫。わたしたち、ラツキーさんを探してたの」

「かんらんしゃを直していたから、この辺にあまりいなかったんですね」

見つかつてよかった、と思つて足元のラッキーさんを見ると、やっぱりまた、あたしを見つめていた。なんだろう、あたしのことそんなに好きなのかな。

「ともえ、キミはなにが見たい？」

「ちよつと行きたいところがあるんだ。だからバイクを直そうと思つてただけど……」

「わかつた。ボクにまかせて。でもその前に、ちよつと待つててね」

そういうと、ふたたびラッキーさんはなにかピコピコ音をたてはじめた。よく見ると、おなかのあたりが緑色に光っている。なにか、あたしたちには聞こえないけどお話し中なのかもしれない。そう思つて待つていると、いつのまにかもういったい新しいラッキーさんが現れた。

新しいラッキーさんも同じ水色のデザインで、一見すると見分けがつかない。ふたりでなにか、話し合っているみたいだった。けつきよく新しいほうのラッキーさんが荷物を引き受けて、さつきまでのラッキーさんがこつちにやつてくる。

「お待たせ。行こうか」

「なにに、バイクつて？」

「お見送りをさせてほしいのです」

けつきよく、みんなできつきのバイクのところまで戻ってきた。実は、ラッコちゃんはへばすゝを海で見たことがあったらしい。これと似てるけど、ちよつとへまんまるゝの数とかが違うみたい。

「ボクがいれば、ジャパリバイクは動かせるよ」

「やったあ！」

さつきまでと違って、バイクはすぐにどるる、と電源が入った。これで、歩かずに図書館に行くことができそう。サイドカーに乗っているイエイヌちゃんも、「やりましたね！」ととってもうれしそうで、なんだかこっちもわくわくしてくる。

見送りに来てくれた子たちも、みんなバイクに興味津々みたいだ。ラッキーさんが「じゃあ、そろそろ行こうか」と言うので、あたしたちはお別れをすることにした。

「じゃあ、またなのです。へいしゝ見つけてくれてどうもありがとうございます！」

「いえいえ、またいつかー！」

「何か依頼があつたら、わたしたちのところまでー」

「うん！ センちゃんもまたね」

「ええ、よろしくお願いします」

空はだんだん暗くなってきていて、もう夕暮れが始まりそうな時間だ。あたしたちは

みんなに手を振りかえすと、オレンジ色になった道をまっすぐに走りはじめた。バイクに乗って風を受けると、立ち止まっているときはまた違った感触がある。

となりのイエイヌちゃんに笑いかけると、向こうも満面の笑みで楽しんでいるみたいだった。

「うふふっ」

つぎはどんなフレンズに会えるのかな、たのしみ。

第一話「であい その4」

「ふう、きょうも仕事しましたねえ」

「もう日が暮れてきたし、そろそろおしまいですかね」

へわすれものセンターには、静けさが戻っていた。依頼が一気に解決して、アルマーもセンチちゃんもようやく一息をついている。陽ももう沈みかけていて、あたりは一気に暗くなり始めていた。

「ん、この匂いは……?」

アルマーがなにかに気がついたらしく、窓に向かって鼻を近づける。なにか、嗅いだことのある匂いが近づいてきているような——と思った次の瞬間、いきなりふたつのシルエットが姿を現した。

「——おい、いるですかー?」

「まったく、わたしたちに出向かせるとは。とんだへたんていたちなのです」

「ああ、へかせ、それにへじよしゆ」

オオコノハミミズクとワシミミズクのふたりが、窓の外からへたんていコンビになにやら文句を言っている。センチちゃんが窓を開けると、「ふう」「お茶のひとつでも飲み

「たいのです」と、来てそうそう要求をし始めた。

「珍しいね。こんなところまで来るなんて」

「まったくなのです。しんりんちほーからここまではとつても長い道のりだったので
す」

「おまえたちの報告がまだなので、わざわざ確認しにきてやったのですよ」

「ん、報告？」と言葉を反芻したところで、「あー！」とアルマーが立ち上がった。なにか思いだした様子の相棒に、センちゃんも少し慌てはじめる。博士たちはちよつとあきれた様子で、わちゃわちゃしている二人組を見守っている。

「え、えつ、なんでしたっけ」

「なんでしたっけではないのです。もしかして忘れていたのですか」

「ほら、あれだよ。残ってるかもしれない黒セルリアンの搜索」

「ああーそういうばー！」

「そういうばではないのです。へしまの下半分はおまえたちの持ち場だったはずなので
す」

「ごめんごめん」アルマーがあやまりながら、ちよつと傷んだ地図を持ってくる。「これに目撃した子の話を書き入れたんだけど、ばらばらだったんだー」

「なんだ、終わってたならばやく持ってくればよかったです」

「しごととは報告するまでなのですよ」

地図には点々とバツが書き記されていて、目撃者の名前と時間が添えられている。以前彼女たちを襲った黒セルリアンについて、博士とセルリアンハンターたちはその後も調査を進めていた。あれと同じものがまだ残っているのは、という不安は、このへしまのフレンズたちに根強い。

「……ふむ。勘違いっぽいものばかりなのです」

「はずれなのでしょうか」

はかせたちは地図をしまうと、センちゃんが出してきたじやぱりまんにはくついた。もぐもぐ食べていると、いくらか機嫌が直ってくる。

「いやあ、ごめんね。今日はちよつといそがしかったから」

「そうなのですか?」

「そうなんですよ。ラッコの探し物をしたり、ヒトの子のお手伝いをしたり——」

「ヒト!? いまヒトと言ったのですか」

「くわしく聞かせるのです!」

じよしゆのミミちゃんが、センちゃんという言葉をさえぎった。「へ?」という顔をしている探偵二人に、博士たちは羽根を広げながら詰め寄る。あまりの剣幕に、思わず探偵コンビはふたりとも丸まってしまった。

「ひいい、なになに」

「いったいなんですかー！」

「いいから、話を聞かせるのです」

「どこで見たのですか」

「みなどの近くの森だよー」

「そうですそうですー」

「むむむ」

「いまはどこにいるのです」

「ばいく？ に乗ってつちやったし、わかんないよー」

「そうですそうですー」

「なんと、逃がしてしまったのですか」

「これはまずいのです。一度逃げられると、なかなかつかまえられるのです」

しばし見つけめ合った後、はかせとじよしゆはふたりを助け起こした。

「仕事なのです」

「もうセルリアンはいいのです。明日からそのヒトの子を連れてくるのです」

「お仕事っ!?!」

「やる気出てきましたよー！」

「……乗せやすくして助かるのです」

ぼそつ、というミミちゃんじよしゆの声に、センちゃんがぴくりと反応した。

「——なにか言いました？」

「な、なんでもないのです」

「それより、その子がどこから来たのか知りたいのです。この辺の建物、なのですか」

「たぶん、そうだと思っただけど……」

「詳しいことはわからないんですが、イエイヌさんと一緒にいましたから。あの子のなわばりって、たしかセントラルでも、さばんな寄りの方じゃ」

「だいぶしぼれてきましたね、じよしゆ」

「きくかぎり、あそこではないかと。はかせ」

そう言うのと、二羽はふわりと浮かんで、窓に足をかけた。いきなり去ろうとするはかせたちに驚いて、アルマーが「ちよつとまってー」と追いつがる。

「つれてくのはいいんですけど、どうするの」

「そうです。ともえさんは、わたしたちの依頼を助けてくれた恩人ですよ」

ちよつと警戒している様子のふたりを見て、はかせたちはちよつと首をかしげた。それから、「ふふふ」「なのです」と不敵に笑う。

「われわれの推測が正しければ、その子はきつとへおたからくをもっているはずなのです」

「すつごいへおたから」なのです。まちがないのです」

「お、おたから!？」

「どんなおたからですか!？」

目を輝かせるたんでいたちに、はかせは「それはいえないのです」ともったいぶったことを言う。

「つれてきてからのおたのしみ、なのです」

「おまえたちのはたらきに、きたいしてるのですよ」

それでは——と言いつつ残して、音もなくはかせたちは飛び去っていく。見送ったアルマーとセンチちゃんは、ようやく人心地ついてソファアに座った。

「おたからかあ……」

「ここでゲットすれば、きつとゆうめいになって依頼も倍増ですよ」

「そうだねえ。がんばろうセンチちゃん」

「アルマーさんもですよ!」

ふふふ……と笑いあつて、へじむしよは店じまいになった。

第二話 「かんき その1」

日差しが、あのへしせつゝのあたりとは全然ちがう。きらきらと照りつけてきて、なんだか空気も乾燥している。

いつの間にか、周りから木が減っていた。森のようなものは見当たらず、一面枯れた草ばっかりだ。

「あつついなあ……」

「ここはもうへさばんなちほーだからね。今は雨季の手前だから、いちばん暑い時期なんだ」

ラツキーさんの解説はとつてもわかりやすい。なんだか周りの景色が変わってきたと思っただけで、別のへちほーにきていたのか。

ラツキーさんが言うには、ジャパリパークにはいくつかのへきこうに合わせたへちほーがあるらしい。ここは、そのうちのへさばんなきこうに合わせたちほーということだ。

「はっはっ……なかなか、この暑さはこたえますね」

「イエイ又ちゃん、大丈夫？」

「イエイ又は高温があまり得意ではない動物だからね。そろそろ、水分補給をしたほうがいいかもね」

ジャパリバイクはとつても快調に進んでいくから気が付かなかったけれど、実はかなりからだの水分が抜けているみたい。

まだ大丈夫そうだけど、イエイ又ちゃんがちよつと心配。

「ラッキーさん、このあたりでお水を飲める場所つてあるかな？」

「ちよつと待つてね。検索中……」

ピピピ、と電子音が続く。何秒かすると、ラッキーさんは「あつたよ」と言った。

「東の方にフレンズがよく集まるポイントがあるみたいだから、そこに向かうね」

ハンドルに置いていた手が、勝手に右へ曲がった。運転はラッキーさんの担当だから、あたしは楽ちんだ。

それにしても、サバンナはとつても広い。

イエイ又ちゃんがまえ、ジャパリパークをとつても広いと言っていたけど、このちほーがいくつもあるんだから相当なんだろうな。

「どのぐらいで着くかな、ラッキーさん」

「すぐ近くだからね。あと10分もすれば着くよ」

「よかつた、すぐ近くだね、イエイ又ちゃん」

「助かります、ありがとうございます、ボス」

「イエイヌちゃんは返事をしてくれないラッキーさんにも、きちんとお礼を言っている。えらいなあ。でも、あたしにおはなしするときに、かたくなるしいしやべり方なんだよね……」

「ねえねえ、イエイヌちゃん」

「? なんでしょう」

「イエイヌちゃんって、どうしてそんなにまじめなの?」

「まじめ……わたしって、まじめなんですか?」

「ええ、まじめだよ。えらいなあって思うもん」

「イエイヌちゃんは首をかしげているけど、ちいさく尻尾をふりふりしているのが見えた。ちよつとだけうれしそう。イエイヌちゃんのいいところを見つけるのって楽しい。反応がかわいくてついついやめられない。」

「わたしの使命はヒトを守ったり、役に立ったりすることですから」

「あーまたそんなこと言って。あたしはご主人さまじゃなくて、おともだちなんだからねー」

ちよつとしたからかいのつもりで言ってみると、イエイヌちゃんは「いえいえ」と大真面目に首をふった。

「ご主人さまでも、おともだちでもいっしょです。わたしがともえちゃんを守ります！」
「ふふ、ありがとう」

「はいー」

さばんなの太陽が、イエイヌちゃんの目をきらめかせていた。水色と金色の目は、あたしと同じで左右ちがう色をしている。

なんだか安心するな。どうしてだろ。

「ラッキーさーん、まだー」

「もう見えてくるはずだよ」

ちよつとした丘を登ると、ラッキーさんはバイクを止めた。話ではこのあたりに水があるって話だけど——

「うーん、水の匂いはしませんねえ……」

イエイヌちゃんあたりを見回しながら、目を細めている。暑いのが苦手って聞いたから心配だったけど、案外元氣そうでよかった。

あたしも一緒になってあたりを探してみると、なにやら大きなくぼみのようなものが見つかった。

一瞬言葉が出てこなくて、さびたネジみたいにあたしはイエイヌちゃんと顔を見合わせた。

「ねえ、もしかして……」

「枯れてますね、これ……」

どうしよう、と足元のラッキーさんを見てみると、ぴきーんとかたまっている。いや、よく見るとふるえているような。

「アワ、アワワワワ……」

「ラ、ラッキーさん!？」

池が枯れてたのは、ラッキーさんにとつても予想外のことだったみたい。でも水がなくなると、なんだか急にのどが乾いてくる。

イエイヌちゃんもちようど同じことを思ったみたいで、目が合うと困ったように笑う。

「どうしよつか、このあたりのフレンズちゃんに聞いてみるとか」

「そうですね、ほかのフレンズの匂いがしないか探してみます」

とりあえずバイクにもどつて、今度はフレンズちゃんをさがしに動き回つてみることにした。

それにしても、どうして水が枯れていたんだらう。やっぱり暑すぎて、もうみんな蒸発しちゃったのかな。でもそしたら、ほかのフレンズちゃんたちもみんなこまっているはずだ。なんとかした方がいい気がする。

「ラツキーさん。ほかのフレンズちゃん、見つかった？」

「まだだよ。今日は暑いから、あんまり外に出たくないみたいだね」

しばらく走っていると、あたしもだんだん暑さがしんどくなってきた。ふと見上げると、空になにか黒いものが見えた。

暑すぎて幻でも見ているのかと思っただけど、ちがう。あれは――

「ラツキーさん！ いますぐあつちに向かつて！」

「わかった」

バイクが砂をまき上げながら、ぐんぐんそこへ近づいていく。不思議そうだったイエイヌちゃんも、匂いで気がついたようだ。

大きな木の周りを、炎が取り囲んでいる。さつき見えたのは、草が焼けて立ちのぼった煙だった。

ボスは一瞬かたまつたあと、すぐに「はなれて」と言った。

「ラツキービーストが消火のために集まってくるから、それまで――」

「待って！ あそこ」

あたしはラツキーさんをさえぎって、木の根本を指さした。そこには古びたテーブルと、ソファがある。

「たぶんだれかの大切な場所なんだよ、このままだと燃えちゃうよ」

「で、でも危ないですよ、ともえちゃん」

「ほつといたら燃え広がっちゃうよ！　せめてほかのラッキーさんが来るまで、ここを守らないと！」

あたしは火に向かつて無我夢中でかけだした。どうする気ですかつ、とイエイヌちゃんが後ろで叫んでいる。

手近な木の枝をとって、燃えているところをめちやくちやに叩く。すると、草がつぶれていくらか火の勢いが弱まった。

「火がこれ以上木に近づかないようにしなきゃ！」

「くっ……手伝います！」

イエイヌちゃんは自慢の爪を使って燃えている草をなぐ。素手なんだから、あたしなんかよりずっと熱いはずだ。

「イエイヌちゃん、ありがと——でも無理しないで」

「こつちのセリフです！」

言い返してきたイエイヌちゃんは、でも強気な笑顔だ。すると、ラッキーさんがぴよこぴよことはねながら近づいてくる。

「へじよそうモード」

ラッキーさんはまだ燃えていないところを探して、草を刈っている。たぶん、燃え広がるのを防ごうとしてくれてるんだ。

でも三分もしないうちに、あたしたちは汗だくになっていた。ただでさえ暑いのに、火に囲まれてるから当然だ。

「イエイヌちゃんは逃げて！ あっついのが苦手なんでしょ！」

「なに言ってるんです、置いて行けませんっ」

「ともえ、さすがに三人じゃ無理だよ。もうすぐほかのラッキービーストも来るから——」

と、そこでラッキーさんの言葉が途切れた。言い返す気満々だったあたしは、思わずラッキーさんの方を振り返る。

そこには——なに……？ あれは……あたらしい、フレンズ、ちゃん？

大きな目玉が、あたしたちを見下ろしている。でも直感で、それがほかのへいきものとは違うなにかだとわかる。

そのへいきものには、目玉があつた。でも、一個しかない。水色で、イエイヌちゃん二人分ぐらいの大きさがある。そして、細長い手が二本、ひよろひよると伸びていた。その先つぽはワニのくちみたいなかたちをしていて、ばくばくと動いている。

へいきものへはちようど炎の途切れ目について、じりじりと近づいてきていた。あたしはこ

わくなって、イエイヌちゃんのもとへ駆け寄る。

「イ、イエイヌちゃん、あれ……」

「ん、なんですか?」

肩を叩かれたイエイヌちゃんは、いつしゅん固まった後、大声で叫んだ。

「せつ——セルリアンです! 食べられちゃいます! ともえちゃん、逃げて!!」

「たつ、食べ——? 逃げてって言っても、ここじゃ」

最悪だ。まわりは完全に火で取り囲まれている。どこにも逃げ場はない。

足がすくんで動けずにいると、イエイヌちゃんが前に飛び出た。

「ぐるぐる……!」

イエイヌちゃんの両目が光り、手足の先からきらきらとした光の粒がわき上がりはじめる。——もしかして、戦うつもり?

「い、イエイヌちゃん」

「下がっててください、ここはわたしが!」

そのとき、セルリアンの触手がいきなり襲いかかってくる。イエイヌちゃんはなんとかそれをはじき、あたしをかばうように両腕を広げた。

なにもできないまま、あたしはその場で腰を抜かしている。ど、どうしよう。見るからにセルリアンは強そうだ。

「ラ、ラッキーさん、ほかのラッキーさんたちはまだ!?」

「もう少しかかるよ……!」

「こころなしか、ラッキーさんの声がせつば詰まったものに聞こえる。不安そうなたたしを見て、イエイヌちゃんはまた笑う。

「だいじょうぶです! いくらおつきくても、弱点のへいしへさえ叩ければ……」

「へいしへ?」

水色の大きな身体には、どこにもそれらしいものは見当たらない。きつと、どこかにあるはずだ。戦ってくれているイエイヌちゃんのためにも、見つけなきゃ。

地面に、触手のさきつぽが突き刺さる。砂ぼこりを上げ、イエイヌちゃんはさつと飛びのいた。

逃げ場は、炎の壁のせいで徐々に狭くなってきた。イエイヌちゃんもまだへいしへを見つけれないらしく、徐々にあせりが見え始めた。

「へいしへ……どこに……」

「あつ、あそこ!」

触手を引き抜くためにかがんだところで、セルリアンの頭の上にキラキラしたへいしへが見えた。——でも。

「くつ……わたしのジャンプ力で届くかどうか……」

「——そうね、でもあたしなら余裕よ！」

どこからか声がする。次の瞬間、セルリアンの形が大きくへっこんだ。上からぐにゅ、と押しつぶされている。

何かがひらめいたかと思うと、ぱっかーんと、セルリアンが破裂した。キラキラとした粒と、水色の破片があたりに飛び散る。

その中に、その子はいた。黒い耳に、オレンジ色のすらりとした手足。ひらりと着地して、周りを見回す。

「さっきよりも火の勢いが弱まってるわ。いまのうちに逃げましょ」

「うっ、うん」

「わかりました！」

あたしはボスを拾って、いちもくさんに駆け出した。たしかに、セルリアンの破片が散ったあたりは火が弱くなっている気がする。

「ここまでくれば大丈夫——あんたたち、平気？ ケガはない？」

「ううん大丈夫、ありがとう。イエイヌちゃんも大丈夫？」

「はい、おかげさまで」

あたしたちを助けてくれたのは、どことなく、ネコっぽい感じのフレンズちゃんだつた。ふさふさとした耳がかわいい。

「わたし、イエイ又つて言います。こっちはともえちゃんです。わたしの——」
「おともだちなのか」

むむ、という顔をイエイ又ちゃんがするので、おもわずにひひと笑い返してしまう。

「イエイ又ちゃん、さつきはカツコよかったよ」

「へへ……ありがとうございます。けつきよく、そちらの方がぜんぶ持つてつちやいまして」

「お名前はなんていうの？」

「あたしはカラカル。このあたりはあたしのへなわばりな。——あんたたち、見かけない顔ね？」

「実は、としょかんまでの旅をしているの。さつきは助けてくれて本当にありがとう」

「いいのよ。あたしのジャンプ力ならあんなの楽勝だから」

自慢げなカラカルちゃんの様子を見て、あたしは図鑑を思い出す。カラカル、というページを探してみるけど、見つからない。

たぶん、抜けてしまったページのどうぶつだ。すると、抱えられたままのラッキーさんが急にしゃべりだす。

「カラカルは、サバンナなどの乾燥した地域に広く生息するネコ科のどうぶつだよ。ジャンプ力が強く、自分の体長の二倍の高さまで飛んだりすることができるんだ」

「へえー」

ラッキーさんがいてくれれば、図鑑に載っていないフレンズちゃんに出くわしても安心だ。とつてもわかりやすい。

「それがうわさのしゃべるボスってやつ？ 初めて見たわ」

「それが、ともえちゃんとしかしやべってくれないんです」

「あー、そういうえばあの子そんなことも言ってたわね」

「あの子？」

「——無茶しすぎよ。あんな火事につっこんでくなんて」

カラカルちゃんは笑っているとも怒っているとも取れるような、ちよつと複雑な表情だ。

「あはは……ごめんなさい。きつとあの場所、だれかが大切にしているんだらうなと思って、つい」

「……そうだったの、ありがとう」

「もしかして、あそこはカラカルさんのおうちなんでしょうか」

イエイヌちゃんは納得した顔だったけど、「ううん」とカラカルちゃんは首をふった。

「あそこはあたしのともだちがお気に入りにしてた場所なの。——だから、守ろうとしてくれてありがとう」

「そんな、結局あたしたち、逃げてきちゃったから」

「そうだ、ボス、火事はどうなりましたか？」

「そうだった、ラッキーさん教えて」

「大丈夫だよ。もう消し止められたみたい」

ラッキーさんはあたしのわきから飛び出て、ぽてつと地面に着地する。カラカルちゃんのものそれに比べるとちよつとおぼつかない。

ベルトがまた緑色に光りはじめて、なにか作業中なふんいきだ。

「安全が確認されたから、バイクのところまで戻ろうか」

「わかった」

よく考えたら、まだ水も見つかってないんだ。それに気づいたイエイエちゃんが、カラカルちゃんにたずねている。

「カラカルさん、このあたりで水飲み場ってありませんか」

「水？　そういうえば近くにあったような気がするけど、どうだったかしら」

「カラカルは水をあまり飲まなくても平気なんだ」

「へえ——じゃなくって、たぶんそこ枯れてるとこだよ！」

「あら、そうなの。ほかにもあるから、あたしが案内してあげるわ」

「ほんとに!!　ありがとう」

「カラカルさん、よろしくお願いします！」

強力な助っ人が来てくれた。とつても助かるなあ。

カラカルちゃんは面倒見もよくて、ちよつとお姉さんっぽいところがある。あたしたちが目を輝かせていると、ふふつと笑った。

「サバンナガイドね、まかせて」